

令和八年度入学試験問題 国語（五十分）

二月二日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は15ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 四、デジタル採点をします。解答は解答欄からはみ出さないように、濃くはっきりと記入してください。
- 五、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 六、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができたりした時は、手を挙げて監督の先生に知らせてください。
- 七、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大阪から夫の転勤で静岡に移り住んだ「私」は、周囲に知人もなく孤独を感じていた。三歳になった娘の聡美は乱暴で、小石を投げつけたり、同世代の子供を転ばせたりする。そのせいで「私」は近所の母親仲間から疎外感を覚えるようになる。ある日、公園で子供から聡美が「どS」と呼ばれていると聞かされ、衝撃を受ける。息苦しい思いを抱えながら帰宅し、夫に愚痴をこぼすが、夫は聞く耳を持たない。「私」は心中では反発するものの言葉にできず、孤独感を深めるのだった。

「どS」事件があつてから、一週間ほど公園に出かけるのをやめた。運動が足りないのか、聡美は「おそといく、おそといく」とぐずる。仕方なく、公園へ連れていった。あの女の子と母親たちに会わないことを祈りながら。

午前中の公園に子供たちの姿はなかった。ほっと X をなで下ろす。

しばらくぼんやりとベンチに座っていたが、聡美が蟻をみつけて踏みつけているのが目に入った。とっさに「やめなさい！」と思い切り手を引っぱってしまった。その拍子に、聡美は仰向けにひっくり返った。大の字に転がって、娘は大声で泣き出した。「もうっ。自分が悪いんやろ。蟻さん踏んづけたりするからっ」

抱き起こして胸に抱くと、よほどくやしかったのか、小さな拳で私の顔やら肩やら、手当たり次第に殴りつけてくる。

「やめて、さとちゃん。痛いよ、痛い」

言いながら、泣けてきた。手足をばたつかせて暴れる娘を抱きとめながら、私は、うう、うう、と嗚咽した。

あほちゃうか、あたし。

ええ大人が、子供みたく泣いて。

① けれど、一度泣き始めると、もう止められなかった。地面にしゃがみこんで、私と娘は、呼吸を合わせて泣きに泣いた。「どうしたの、お嬢ちゃんたち。何を泣いてるの」

頭上でおだやかな声があった。 A して、手の甲で涙を拭う。聡美を抱いたまま立ち上がると、目の前に作業服を着たおじいさんが立っていた。

「ああ、いえ。なんでもないんです。なんだか、子供が泣いてるの見てたら、こっちまでつられて泣いちゃって」
言い訳しながら、また涙がこみ上げた。見ず知らずの人に、とんだ失態を見られてしまった。それがなさけなくて、泣けてきた。

「どれ。おじちゃんが、お話をしてあげよう。いいかい、魔法使いの話だ。涙なんて、吹っ飛ばよ」

おじいさんは片足を少し引きずりながら、ひよこひよこことベンチに向かった。腰を落ち着けると、こっちに向かつて手招きをしている。私はようやく冷静に、その人のことを B 見た。

薄汚れた作業服。ポケットには汚れた軍手が突っこんである。ベンチの近くに、よれよれの手提げ袋。そして大きなゴミ袋と、竹ぼうきが置いてある。どうやら公園の清掃の人らしい。年齢は七十代くらいだろうか、貧相な感じはしない。

けれど物騒な世の中だ。人の弱みにつけこんで、何をされるかわからない。私は自然と身構えた。

おじいさんはポケットから四つ折の紙を取り出した。かさかさど広げる。朗々とした声で読み始めた。

「『公園のぶらんこが風に揺れている。と、君は思うかい？ いやいや、そうじゃないんだ。いいことを教えてあげよう。実はね、ぶらんこの上には、空気みたいに透き通った魔法使い、『ランコ』が乗っかっているんだよ』」

② びたり、と聡美が泣きやんだ。私は、「あの……」と何か言いかけたが、何を言おうとしていたのか、すぐに忘れてしまった。そうして、私と聡美は出会ったのだった。「公園の魔法使い」と。

朝十時半までに、掃除、洗濯、お昼のしたく、すべてこなして出かける準備をする。お気に入りの帽子をかぶり、聡美にも帽子をかぶせてやる。娘は跳ね上がって喜んでる。

「魔法使いのおじいさん、会うの？」と舌足らずの声で訊く。

③ 「うん、会うよ。お話の続き、聞こうね」と答える。手をつないで、公園に向かう足取りが軽い。

④ 公園で出会った不思議なおじいさんの名前を、まだ聞いていなかった。けれど、聡美がいつのまにか「魔法使いのおじいさん」と呼ぶのを、その人は愉快そうに受け入れている。

公園の清掃をしているおじいさんは、だいたい十一時頃^{ごろ}に仕事を終える。その頃をねらって、私たちは出かけていった。

ベンチに座って、お話の続きを聞く。そのお話は、大人の私が聞いても、十分にわくわくする内容だった。公園に住む魔法使いランコとブランの物語。日本の片隅^{かたすみ}の小さな町から始まって、物語は世界をどんどん広げていた。いじめっ子「メッコ」といじめられっ子「ラレッコ」が、魔法使いの采配^{さいはい}で仲良くなり、チームを作って、人間に取りつく悪魔^{あくま}「ヤルキナイン」と闘^{たたか}う。公園の清掃をするおじいさんも、チームの束ね役で出てくる（実はこのおじいさんが魔法の国の王様なのだ）。お話を聞いているあいだじゅう、私たちは魔法使いと一緒に泣いたり笑ったり怒^{おこ}ったり空を飛んだりした。物語というものが、こんなに人を魅^み了^{りよう}するものだとも初めて知った。

聡美がどのくらい理解しているかはわからない。けれど、あきらかに夢中だった。不思議なことに、お話を聞き始めてから乱暴をしなくなった。心優しい魔法使いと、メッコとラレッコ、おじいさん。彼女^{かのじよ}の心は、いつもみんなと一緒にいるようだった。公園では私たちを待ち受けて、おじいさんがベンチに座っている。日^ひだまりの中の優しい横顔に向かって、私と聡美は声を合わせてあいさつする。

「こんにちは、魔法使いのおじいさん」

おじいさんは、お話の中のおじいさんそのもののように、ゆったりと大きな笑顔になる。

「やあ、聡美ちゃん。待ってたよ」

私がポットに入れて持ってきたミルクティーを、「ああ、おいしい。魔法にかかってしまいそうなくらいだ」とゆっくりと飲み干す。それから、お話が始まるのだ。

お話のあとは、お天気の話だとか、庭の花壇^{かだん}の話だとか、聡美の成長の話だとか、主に私のほうが話をする。そのあいだ、またおいしそうにミルクティーを飲む。聡美はおじいさんの隣^{となり}に座ったり、膝^{ひざ}に乗って甘えたりした。おじいさんは、子供の扱^{あつか}いが実にうまかった。子供を育てた経験があるのだろう。けれど、彼^{かれ}が自分の話をすることはなかった。

「光岡さんって、最近、公園の掃除のおじいさんなんかと仲良しなのよね」

あるとき、バス停でばったり会った麻美^{あさみ}ちゃんのママに、さりげなくそう言われた。私は、うん、とうなずいて、Xを張った。

「すごい仲良しなの。⑥あのおじいさん、すごい人やねんよ」

バスの中で、麻美ちゃんママと晴香ちゃんママが、光岡さんおかしいんじゃないの、とひそひそ話をするのが聞こえても、ちっとも気にならなかった。

けれど、ひとつだけ、気になることがあった。

それは、このお話がいつか終わってしまうこと。

聡美が、いや、私だってこんなに楽しみにしているお話が、そのうちに終わってしまうのだろうか。そうしたら、魔法が解けて、聡美がもと通りの乱暴な女の子になってしまうかもしれない。そして、おじいさんと、二度と会えなくなってしまうかもしれない。

どうしたらいいんだろう。

⑦お話は、どう考えても終わりに近づいていた。すぐにでも続きを知りたい気持ちを抑えて、ついに私は訴えた。

「おじいさん。このお話、終わらせないでください」

おじいさんは、不思議そうな顔になった。

「どうしてだい？」

私は、ふたりを見上げる聡美に視線を落とした。

「いまは、お話の魔法で、この子がおとなしくなってる気がするんです。この子、女の子なのにひどく乱暴で……」

初めておじいさんと会ったとき、泣いていた理由。私はごく自然に、正直に打ち明けた。おじいさんは黙って聞いていたが、やがてやわらかく聡美の背をなでながら、言った。

⑧「どんな物語にも終わりがある。なぜなら、物語には Y からだよ」

私はおじいさんを見た。おじいさんは、優しいまなざしを私に向けていた。

「命あるもの、終わりがあるから、いとおしく思えるんじゃないかな。それを、この子にゆっくり時間をかけて教えてあげてください」

聡美は澄んだ目でおじいさんを見上げていた。私は、急におじいさんが遠くへ行ってしまふような気がして、さびしいような

せつないような、震える思いでいっぱいになった。

「そういえば、この物語の作者のことを、話していなかったね？」

私は首を傾げた。おじいさん自身が書いたのだろう、と思っていたのだ。おじいさんは、いつも物語の紙片を取り出すポケットから、小さな新聞の切り抜きを取り出して、私に手渡した。新聞には、十二年まえの日付があった。

国際児童文学賞受賞 木ノ内たまきさん（18）

花束を抱いて、はにかみ笑いをしている少女の写真が写っている。私は、「この人は……」と、つぶやいた。

「孫娘だよ。いま、病院でこの物語を書いている。あなたと、聡美ちゃんのために」

十八歳で大きな賞を取ったのに、直後に病気になるまで一作も書けなかった、とおじいさんは打ち明けてくれた。

いま、毎日物語を書いて、毎日ファックスで送ってくる。まるで、命をつなぐように。

「自分の書いた物語をいとおしんでくれる誰かがいる。それがあの子の、支えになっているんだよ」

ありがとう、とおじいさんは小さくつぶやいた。それから、皺だらけの指先で目頭をそっと押さえた。

⑨ そのとき、魔法使いでさえ止められなかった。こぼれ落ちるひとすじの涙を。

（原田マハ『独立記念日』所収「魔法使いの涙」より）

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 本文中の X には、共通する語が入る。漢字一字で答えなさい。

問二 A・B にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア じつくりと イ ほつと ウ はつと エ ほんやりと オ そつと カ ぼかんと

問三 — 線部①「けれど、一度泣き始めると、もう止められなかった。地面にしゃがみこんで、私と娘は、呼吸を合わせて泣きに泣いた」とありますが、このときの二人の心情を説明したものとしてみっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 叱られたことに対する驚きで泣く聡美を必死にあやしなながら、「私」は周囲に醜態を晒している自分がひどく情けなくなっている。

イ 感情を全面に出す聡美にうらやましさを感じると同時に腹が立ち、「私」はこれまでこらえてきた気持ちが爆発している。

ウ 母親に八つ当たりしている不甲斐なさで泣いている聡美の姿を見て、「私」は娘の成長に感動がこらえられなくなっている。

エ 怒られたことに対する悔しさから泣いている聡美につられて、「私」もこれまで抱え込んでいた気持ちが抑えられなくなっている。

問四 — 線部②「私は、『あの……』と何か言いかけた」とありますが、「私」はなぜこのような行動をしたのですか。おじいさんに対する「私」の考えが述べられている一文を本文から探し、最初の五字をそのまま抜き出して答えなさい。

問五 — 線部③「公園に向かう足取りが軽い」とありますが、この時の二人の気持ちを、「く気持ち」につながる形で、十五字以内で答えなさい。

問六 ——線部④「公園で出会った不思議なおじいさんの名前を、まだ聞いていなかった」とありますが、本文には最後までおじいさんの名前は登場しません。それによって得られる効果としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名前をあえて聞かないことで、「私」が心理的におじいさんのことを避けていることを暗示する効果。
- イ 名前を出さないことで、「私」と聡美とおじいさんの距離感や関係が深まらなかったことを表す効果。
- ウ 「私」と聡美にとって大切なのはおじいさんではなく、おじいさんの物語であるということを示す効果。
- エ 名前がないことで現実と幻想の境界があいまいになり、おじいさんの不思議な雰囲気^{ふんいき}を高める効果。

問七 ——線部⑤「彼女の心は、いつもみんなと一緒にいるようだった」とありますが、これは聡美のどのような様子を表していますか。「く様子」につながる形で、十二字以内で答えなさい。

問八 ——線部⑥「あのおじいさん、すごい人やねんよ」とありますが、この時の「私」の気持ちの説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア おじいさんのすばらしさを伝えることによって、実際に会ってほしいと思っている。
- イ 聡美や自分を助けてくれたおじいさんに感謝し、その存在を誇らしげに語っている。
- ウ 誤解されているおじいさんの本当の姿を伝え、理解してもらいたいと考えている。
- エ 孤立^{こりつ}していると思われるのを恐れ、おじいさんと仲良しだと虚勢^{きよせい}を張っている。

問九 ——線部⑦「おじいさん。このお話、終わらせないでください」とありますが、「私」はなぜこのように頼んだのですか。「私」と娘それぞれの状況を踏まえて四十字以内で答えなさい。

問十 — 線部⑧ 「どんな物語にも終わりがあある。なぜなら、物語には Y からだよ」とありますが、Y にあてはまる適当な語句を考え、五字以内で答えなさい。

問十一 — 線部⑨ 「そのとき、魔法使いでさえ止められなかった。こぼれ落ちるひとすじの涙を」とありますが、この表現の説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「魔法使い」という架空の存在を出すことで、これまで見られなかったおじいさんの心の温かさを強調している。
- イ 超自然的な力を持つ魔法使いでさえ止められないと表現することで、おじいさんの感慨の深さを示している。
- ウ なんでもできるはずの魔法使いが涙をこぼすと表現することで、孫娘に対して何もできない悲しみを表している。
- エ 「魔法使い」に例えられるおじいさんが涙には抗えないと表現することで、孫娘の病気の重さを暗示している。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

食物を分配する特徴をもった種とそうでないものに分けると面白いことがわかります。ここでいう分配とは、相手に食物を差し出すような積極的な行動ではなく、相手が目の前の食物を取ってもそれを許容するといった消極的なものです。たとえば、ニホンザルは、基本的に食物を分配しません。序列のはっきりしたサルは、エサを前にすると、必ず強いほうが独り占めをし、弱いほうが引き下がります。一方、チンパンジーやゴリラは分配をします。エサを持っているオスは、弱い立場にあるメスや子供から分配を要求されれば、取っていくのを見逃すことがある。これが霊長類の食物分配です。

霊長類には450（日本モンキーセンター編『霊長類図鑑』（京都通信社）2018年による）ほどの種があるとされますが、おとな同士で食物が分配される種では必ず、おとなから幼児に対しても食物が分配されています。A、おとなから幼児に食物が分配されていても、おとな同士で分配されるとは限りません。これはつまり、元々はおとなが、そのおとなが養育している子どもに食物を分配し、その行為が、おとなの間に普及していったということでしょう。

さらに興味深いのは、この食物分配が、ゴリラや人間など、高い知性をもった種にだけ起こることではないということです。南米には、タマリンやマーモセットなど、ポケットモンキーと呼ばれる小さなサルたちがいますが、彼らの社会では、おとな同士の間でも食物の分配が見られます。彼らは、双子、三つ子を当たり前のように産みます。複数の子どもたちをお母さんだけでは育てることができないので、年上の子どもや複数のオスたちが、生まれた子どもを背中に乗せて運び、子どもたちに食物を配分するなど、皆で世話をします。

B、食物の分配は、知性の高さではなく、子育ての負担の大きい社会で起こる現象であるということです。子育てにかかる親の負担が大きいと、ほかの個体が子育てに関与する機会が生じる。ゴリラをはじめ類人猿の場合、子どもの成長が遅いので、子育ての期間が長く、お母さんのお乳を長期間吸っています。離乳期間も長く、その間徐々におとなの食物を覚えていきます。お母さんが長い間手をかけなくてはいけないことも、負担が大きいということなのです。

短期間に成長の遅い子どもをたくさんつくる人間は、ポケットモンキーのようなIと、類人猿のようなIIという、食物分配を引き起こす二つの要因をあわせもっているのです。

食物分配と共感力には強い関係があります。食物分配をしないニホンザルと、食物分配をするタマリンやマーモセットで、他者をいたわる行動（アザー・リガーディング・ビヘイビア）がどれくらい違うかを調べた結果、ニホンザルではこの行動が見られなかったのに対し、タマリンやマーモセットでは、脳が小さいにもかかわらず、この行動が多く見られました。

こうした研究から、^②共感力は、共同で子どもを育てる種、子どもの成長に時間が掛かる種で発達した可能性が高いと推測できます。こうした共感力が、おとなと子どもの間だけでなく、おとな同士の間へと拡大したのでしょう。

ただし、人間の共感力の強さは、ほかの霊長類の比ではありません。

^③サルにも共感力があります。1990年代の初めにジャコモ・リゾラッティというイタリアの学者は、サルの脳の中では、ほかのサルの行動を見ているときと、自分がその行動をしているときと同じ部分に電気が発生することを発見しました。まるで鏡に映したような反応であることから、ミラーニューロンと名付けられましたが、これは他者の考えていることを「理解する」能力ではありません。他者の感じていることを「同じように感じる」エンパシーと呼ばれる能力です。サルには「サル真似」ができません。相手の行動を即座にそっくり真似をすることはできないし、ましてや真似をする相手がそこにいない状態で同じことをすることはできないのです。

一方、人間は目の前にその人物がいなくても、そっくり真似ることができます。悲しい映画を観ると、映画館を出たときに気分が落ち込んでいたりとか、ヒーロー映画を観たときには、自分もヒーローになった気分になるとか、こういう現象が起こるのは人間だけのものでしょう。他者と同じ動きができるだけでなく、同じような心持ちにもなります。他者が悲しんでいたら自分も悲しくなるし、他者が怒っているのを見ると自分も怒りたくなる。コピーする能力ともいえるこの感情の動きもまた、人間の高い共感力の証しです。

「教える」という行為ができるのも人間だけです。

「学ぶ」ことはどんな動物でもします。動物の子どもは、親や年上の仲間に叱られて学ぶのが基本です。ニホンザルの子どもも、これをやったらまずいということや年上の仲間から叱られて学ぶ。「教える」のではなく、「叱る」ことで学ばせるのです。ゴリラは、ぼくのように、ゴリラになろうとしてゴリラの群れに入ってきた人間に対しては叱ってくれますが、これも「教える」ではありません。^④「教える」には条件があります。自分と相手の認識の違いを互いに理解している状況で、知識のあるほうが足りないほうに自分の不利益を顧みずに行うのが「教える」で、教えるほうが、自分の利益になるような誘導の仕方したら、それは

「利用」であって教えたことにはなりません。

人間は、「教える」をさらに発展させ、親と親以外のおとなたちが、一生懸命子どもを先導します。

サルやゴリラの世界から見ると、人間は、とてつもなくおせっかいな生き物に違いありません。子どもがやろうとしていることに手を貸すだけではなく、まだやろうともしていないことに対して、「こうなったらいい」「あれを見て。君もいずれあのようになる」などとやって、背中を押したり、子どもの手を引いたりする。こんなことはほかの動物は絶対しません。共同保育が人間のおとなをおせっかいにしました。そして教育を生みました。人間はおせっかいになったからこそ、子どもは目標というものをもつようになったのです。

人間の家族を支える高い共感力は、共同保育と共食によって高められた特別な能力です。そして、この人間の共感力を向上させたのは音楽でした。

言葉の通じない赤ちゃんにかけられる言葉は、「インファント・ダイレクテッド・スピーチ」とか「マザリース」と呼ばれます。「対乳児発話」「育児語」などと訳されるこれらの音楽的な音声は、ピッチが高く、変化の幅が広く、母音が長めに発音されて、繰り返しが多い。これは、世界共通の特徴です。赤ちゃんは、言葉を聞いてもその意味を理解するわけではありません。聞いているのは言葉のトーン（音調）です。日本人の赤ちゃんが日本語を話せないイギリス人の言葉もちゃんと聞いているのは、トーンを聞いているからです。

ペットに話しかける「ペット・ダイレクテッド・スピーチ」もよく似ています。ぼくたちがペットに話しかけると、言葉を理解してくれるとは思っていませんが、^⑥赤ちゃんに話しかけると同じように話し掛けますよね。ペットも、言葉を理解するのではなく、その声のトーンを聞いているわけです。

こうした音声を通じて生まれるのが信頼です。人間の赤ちゃんが、ゴリラのように抱きつばなしではなく、離れても育てることができているのは、この音声があったからだとはよくは思っています。離れたところから声を投げかけても、赤ちゃんは、お母さんに抱かれているような幸福な気持ちになれる。まだ言葉を解さない子どもに対して与えられるこれらの音声は、やがて子守唄を生み、C おとなの間で広まって音楽になったというのがぼくの考えです。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 A C にあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し用いないこととします。

ア たとえば イ あるいは ウ つまり エ さらに オ しかし

問二 — 線部① 「この食物分配が、ゴリラや人間など、高い知性をもった種にだけ起ることはないということですが、食物分配はどのような種に起るのですか。「種」につながるように本文中から十字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問三 I・II にあてはまるものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 多産 イ 長距離移動 ウ 弱者への配慮 エ 高い知性 オ 遅い成長 カ 親の愛情

問四 — 線部② 「共感力」とありますが、ここにおける共感力は何を基準にして考えていますか。本文から十字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問五 — 線部③ 「サルにも共感力があります」とありますが、次の問いに答えなさい。

(1) サルにおける共感力とはどのようなものを指していますか。適切に説明した一文を探し、最初の五字をそのまま抜き出して答えなさい。

(2) 人間の共感力は、サルの共感力と比べてどのような点が異なっていますか。本文中の言葉を用いて二十五字以内で説明しなさい。

問六 —— 線部④「『教える』には条件があります」とありますが、次の中で本文中の「教える」の例としてあてはまらないものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 小学生の娘に質問されて、親が知っている数学の公式についての考え方を教える。
- イ 姉が幼児の妹の手を持ちながら一緒に鉛筆を動かす、ひらがなの書き方を教える。
- ウ 必要な課題を学校に取りに行ってもらうために、母に課題の置き場所を教える。
- エ 「そんなミスをするな」と厳しい言葉を掛けて上司が部下に仕事のしかたを教える。
- オ 体育のテストにむけて、サッカー部の部員が放課後に初心者にドリブルを教える。

問七 —— 線部⑤「人間はおせっかいになったからこそ、子どもは目標というものをもつようになったのです」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分がやりたいことができなかつたことをおとなたちが後悔し、子どもたちの考えを何でも認めてくれることで将来像を思い描けるようになったということ。
- イ 子どもたちがまだやろうとしていないことを、おとなたちが先に示してイメージさせ、そこにたどり着けるように導こうとしているということ。
- ウ 子どもたちがいまやっていることをおとなたちが応援することで、その先の目標を子どもたちが思い描けるようになっていくということ。
- エ 物事をよく知らない未熟な子どもたちに代わっておとなたちがあるべき姿を示すことで、子どもたちが正しい人間になろうとするということ。

問八 —— 線部⑥「赤ちゃんに話しかけると同じように話し掛けますよね」とありますが、「同じように」とはどのように話し掛けることを指しますか。本文から具体的に述べられている部分を三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問九

本文の内容としてふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア ニホンザルやチンパンジーは序列がはっきりしているが、弱い立場から要求されれば食物を分配する。
- イ おとながこどもたちに分配する行為こういが先にあつて、おとな同士で分配する行為が生まれるのである。
- ウ 霊長類れいちようるいの食物分配について調べた結果、脳の大きさと食物分配の相関係数は見られなかった。
- エ 学ぶことや叱ることはどのような動物でも行われるが、教えるという行為ができるのは人間だけだ。
- オ ペットは人間の赤ちゃんのようにトーンを聞くことはできず、話し掛けた人間に共感することはできない。
- カ 人間は音声による信頼関係しんらいが築けていれば、遠くから声を掛けても親のぬくもりを感じることができる。

三次の短文中的——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 オウフク分の交通費をもらった。
- 2 若者もトウヒョウに行こう。
- 3 失敗はセイコウのもと。
- 4 強力なケンゲンを持つ。
- 5 リンジで会議を行う。
- 6 カイサツを通って電車に乗る。
- 7 他者をウヤマう心を持つとう。
- 8 追加で本をスる。
- 9 美術館にドウゾウを見に行く。
- 10 これまでのがんばりは決してトロウではない。

